

---

# てのひらの中のバラ～或るヴァンパイアの贖罪～

カイリ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

てのひらの中のバラ～或るヴァンパイアの贖罪～

### 【Zコード】

N9162A

### 【作者名】

カイリ

### 【あらすじ】

わたしに助けを求めてきたのは、優しすぎる吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>……。生きること、人の命の大切さ。それは多くの矛盾を抱えたものだった。

どうして私は生きているのだろう。どうして私が、生きているのだろう。

人の命を犠牲にしてまで尊いモノが、この身の何処にあるというのだ。

この穢れた手を美しいと言つてくれたお前に、この先私はどうやって罪を償つていけばいいのだ。

一体いつになつたらこの苦しみから脱け出すことができるのだ。  
私は何のためにこの罪深い身を引きずつて、何をすれば立ち止まるのだ。

私をこの生き地獄から助け出してくれる者は、誰なんだ。

……教えてくれ。助けてくれ。……殺してくれ。誰か。  
誰か。

## ACT・1 Chap・1

### Chap・1

空が、心なしか広く感じられた。じきとうるこー時任流惟は成績表の入ったかばんを両手で抱えて、校門前の下り坂を一気に駆け下りた。頬に吹き付ける風が柔らかい。流惟は淡く微笑を浮かべて大きく息を吸つた。

なんて気持ちのいい日なんだろう。思わず鼻唄を歌いながら踊り出したくなるのを堪えて、流惟は坂を下りきつた曲がり角にある家に目を向けた。

叶医院。この団地唯一の病院じぎょうで、規模は大して大きくはないけれど、腕は確かだ。医院長の那由多なゆたには、小さい頃から遊んでもらつたりしている。

「那由多せんせえーっ」

休憩時間なのか、窓の向こうのテーブルでマグカップ片手にテレビを見ている彼に、流惟は大きく手を振つた。那由多が気付き、軽く手を上げる。流惟は嬉しくなつてますます大きく手を振る。その拍子に、勢いあまつて転びそつになつた。

「ただいま

流惟は玄関の戸を開けて言った。その目に、靴箱の上の封筒が映り込む。宛名は时任流惟様、となっていた。手に取り引つくり返してみると、差し出し人の名前は書かれていなかつた。

「誰からだろ?」

流惟は目を丸くして封を切る。中には一つ折りにされた紙が入っていた。それを抜き取る。薔薇の香りが鼻孔をくすぐった。

「ラブレターかな？」

自分の言葉にくすりと笑い、紙を広げた。

その顔が、笑顔のまま引きつる。

横罫の引かれた便箋の中央、黒く細いペンで書かれた文字は、ただ一言のみを綴つていた。

わたしを殺してください、と。

流惟は何度か目をしばたいてみたが、そこに記された言葉は変わらない。流れるような伸びやかな文字は、しかしどこか緊迫した感を彼女に与える。流惟は困惑した。

「えーと……何これ？」

嫌がらせだらうか？

思い、流惟は首を振る。少なくとも嫌がらせを受けるようなことをした覚えはないし、そんな相手もいない。取り立てて仲の悪い、気の合わない人も心あたりがなかつた。

单なるいたずらだらうか。そうならいい。けれどなぜか、心中に引っ掛かるものがあるような気がする。

「せっかく、明日から夏休みなのにな……」

流惟は溜め息と共にそう漏らした。

存外よかつた成績のおかげで舞い上がっていた気分も、すっかり沈んでしまつた。

## C h a p · 2

翌朝、恐る恐るポストの中を覗いた流惟は、ほつと胸を撫で下ろした。あの変な手紙は入っていないようだ。

昨晩は手紙が気になつてあまり眠れなかつた。  
誰があん  
な手紙を書いたのだろう。いたずらだとは思うが、もし本気だとし  
たら。

差出人は、自分の知り合いなのかもしれない、と思う。全くの他人に、殺してほしいと頼まれるいわれはない。

流惟は、頭の中が混乱するのを感じた。推理小説などといったものについてぞ縁のない生活を送ってきた彼女である。手紙の差出人を推理して見つけ出すなんて、到底無理な話だ。

流惟はリビングのテーブルの上に新聞を置くと、そのまま自分の部屋へ引き上げた。午前六時。朝食にはまだ早い。起きるのが早すぎたようだ。

ベッドに寝転がり、せつかくの春休みだし、もう一眠りするのも悪くないかもしれない、などと思つ。 そうだ、そうしよう。  
思い付いたら即行動、が流惟の信条だ。

布団を被つて目を閉じたちょうどその時、背後で何かが落ちる  
ような音がした。動くのも億劫だったが気になり、「ゴロリ」とそちら

に寝返りを打つ。

畠に飛込んできたのは、フローリングの床の上の白い封筒。

流惟は背筋が寒くなるのを感じた。部屋の窓は少し開いているが、人が入ってきた気配はないし、そもそも入って来れる訳がない。流惟の部屋は一階なのだ。わざわざ手紙を届けに壁をよじ登つてくる人がいたらお畠にかかりたいものだ。

でも、じゃあ手紙はどこから?

流惟は高鳴る心臓を押さえて封筒の中の紙を取り出した。昨日と全く同じ真っ白な横罫の便箋。震える手でそれを開き、畠を落とした。

『わたしを殺してください』

昨日と同じ言葉が、流麗な文字で綴られている。流惟はシャツの胸元をぎゅうっと掴んだ。

いつたい、誰なんだろう。こんな君の悪いいたずらをするのは。

ふと、もう一枚あることに気が付く。流惟はそれをゆっくりと読み始めた。

『こきなりこのよつな手紙を送りつけて、申し訳ありません。けれどどうか、お願いいたします。

わたしを殺してください。

わたしはサイプリスと申します。あなたは憶えていないかもしれません。

せんが、わたしはあなたと以前お会いしたことがあります。  
わたしを殺してください。

あなたからの良い返事を、心よりお待ちしております』

流惟は手紙から田がはなせなくなる。君が悪く、悪質ないたずらだ。サイプリスなどといいういかにも仮名じみた名前を使つていることにも信用がいかない。

けれど流惟は、このサイプリスが、ふざけているようには、どうしても思えなかつた。何故かはわからない。手紙の、『あなたは憶えていないかもしだせんが、わたしあなたと以前にお会いしたことがあります』という一文が気にかかるからかもしない。……これだけ、口先だけの嘘であるだうに』。

## C h a p . 3

手紙は、その日から毎日一通ずつ届いた。毎回同じ内容だったが、全て手書きで、微妙に違っている言い回し。このサイプリスと云う人間は、口が巧く人の心を掴む天才だと思つ。たつた三、四通のメールを読んだだけで、流惟はサイプリスをどうにか助けてあげたいと思うようになっていた。サイプリスを死なせてはならない、と感じじる。

流惟はサイプリスからの手紙を開いた。今日のも、同じ文から始まっている。流惟はそれにひとつおり目を通すと、手近あつたボールペンを滑らせた。

『あなたはなぜ、そんなに死にたがるのですか。なぜ死ぬ必要があるのですか？ 自分の命を粗末にするのは、とても馬鹿なことだと思います』

そこまで書いたはいいが、馬鹿馬鹿しくなつてボールペンを机の上に置いた。

そもそも手紙を書いたところで、サイプリスがこれを見ることはないのだ。

「ほんと、意味分かんないよ…………」

流惟は咳き、便箋を二つ折りにしてボールペンの下に入れた。朝食を食べて戻ってきたときにもしこの便箋がなくなつていたら、信

じるのに。

溜め息混じりにひとついづけると、流惟は部屋をあとこした。

+

「なくなってる……、」

流惟は机の上を真っ直ぐに見据えたまま立ち廻へし、やつとそれだけを口にした。

ないのだ、先程書いた手紙が。ボールペンは有るのに、便箋だけがなくなってしまった。

流惟はにわかに体の力が抜けていくのがわかつた。床に膝をつくと、白いものが目に写る。封筒だった。表に时任流惟様、とだけ書かれた封筒だった。

流惟は汗ばむ手でそれを開けると、息を吐いて目を落とした。

『お返事を下さって嬉しいです。お恥ずかしながら、わたしには自ら死ぬことのできない理由があります。自分では死ねないです。私が死ぬ必要、それはこれ以上の罪を重ねないためです。私が生き続けるということは、その分だけわたしの犯す罪が増ええるということなのです』

そこまで読んで、背筋が水を浴びたように寒くなるのを感じた。サイプリスは、犯罪者なのかもしれない。未だ捕えられていない、逃亡中の犯罪者だ。それならば、罪を重ね続けないために自分を殺してくれ、という頼みも分かる。否、死を望むほど罪を悔やんでいるのなら、自分でやめることはできないのだろうか？

頭の中がひどく混乱してきた。流惟はその突破口を探るよつて、手紙の続きを田で追つた。

『聰いあなたのことですから、わたしが自分自身でどうにかできるのではとお思いでしょう。けれどどうか、わたしに常識的な償いかたを求めるいで下さい。自首をしたところで、警察はわたしを相手にはしてくれません。自分で罪を悔やんでも、止めることはできなのです。わたしの罪を終わらせられるのは、わたしを殺せるのは、この世では唯一人、あなただけなのです』

流惟は顔をしかめた。サイプリスのいう意味が、よく分からない。自首をしても相手にされないというのだから、彼は犯罪者ではないのだろう。では、サイプリスが犯した罪というのは？　そして、サイプリスを殺せる人間が、流惟だけというのは？

疑問ばかりが重なり頭を悩ませていると、もう一枚、手紙が封筒の中に入っていることに気付いた。流惟はそれを抜き出し、田を走らせ、それから果然とその文字を見つめた。

『信じられる話でないことはわかつております。けれどあなたなら信じていただけると願い、打ち明けましょう』

わたしは、人間ではありません。ヴァンパイア　つまり、吸血鬼なのです』



八月の田畠は青々と茂り、日に眩しく映つた。電車の外の景色は、めまぐるしく巡つていく。

サイプリスの衝撃的な告白を受けてから数日の間は、サイプリスの「冗談かと思った。けれどどうやら、『冗談ではないらしい。彼はある新聞を見て欲しい、と同封してきた。言われるがままに記事に田を通した流惟は、はて、と首を傾げた。

『丁寧春日町で女性の痛いが発見された。死因は自宅のベランダからの転落によるものとみられている』

亡くなつた女性には悪いが、これといって大事件と言うわけではない。実際、記事もそれだけであり、深く追及はされていない。この記事とサイプリスがヴァンパイアであることとの間に何かしらの関係があるとは思えない。けれどサイプリス曰く、その女性の死因は転落死ではなく、失血死 サイプリスに血を吸われたせいだという。

サイプリスは流惟に自分の屋敷にきてほしいと頼んだ。

危険なことは容易に想像できる（それはサイプリスがヴァンパイアであるなしにかかわらずだ）。けれどあえて、彼女はサイプリスの屋敷に行くことにした。丁度夏休みだし、何よりサイプリスを助けなければならない。ここまで関わった以上、死ぬかもしれないサイプリスを見捨てるわけにはいかなかつた。

「流惟、あまり身を乗り出すなよ」

「大丈夫、那由多せんせ。風が気持ちいいよ」

「ああ。ここまで吹き込んでくる」

叶那由多はふうと溜め息を吐きながら、流惟に笑みを見せた。

流惟ははじめ一人でサイプリスの屋敷に行こうとしていた。それをうつかり那由多に漏らしてしまっては。那由多は当然のことながら猛反対したが、流惟の意思が揺らがないと分かると、自分も付いていくと言い出したのだ。流惟も一人でヴァンパイアの屋敷に行くのはあまりに不安だったのに至る。

流惟は、昔から自分に甘い彼の向かいに座りなおした。

「せんせ、病院の方は大丈夫なの？」

「親父に任せてきたからな。まだ若いんだし、平氣だろ」

那由多は煙草吸うぞ、と断りを入れてから胸ポケットの煙草箱を取り出した。

確かに、那由多の父はまだ50代にもなっていない人で、病院を早々に那由多に譲つて以来は『』隠居としてあちこちを旅したり、たまに病院で那由多の代わりに診察をしたりしているようだった。気楽なもんだよな、と父親以上にしつかりした息子は溜め息をつく。

「何度も言つが、流惟」

那由多は紫煙を吐きながら真面目な顔をつくつた。お医者さんなのに体に悪いことをしているなんて矛盾してるなあ、などと考えていた流惟は短く返事をして彼の顔を見返す。

「危ないことは絶対にするな。必ず俺を頼れ」

「あいつ」

大きく頷くと、那由多は満足そうに表情を崩して流惟の頭を撫でた。

「…………那由多せんせ。サイプリスさんは、本当に吸血鬼だと思う？」

「さあな。そんなものはいないと思いたいね、俺は」

「せんせ、怖い？」

「怖がつていいのはお前だろ？」  
流惟が笑みを含んだ表情で訊くと、嘲笑で返されてしまつ。あな  
がち間違つてもないので、流惟は笑つて誤魔化した。

## C h a p . 2

何本か電車を乗り継いで降り立つた春日町は、世辞にも都会的とは言えないところだつた。けれど廃れた感は全くなく、広がる緑の向こうに見える家も、どこか優雅だ。

「うわあ……」

流惟はまるで絵本の中に出でてくるような森の小道の中を歩きながら歓声をあげた。鬱蒼と茂った木々の間から差し込む木漏れ陽があたたかい。確かに、こんな場所にならヴァンパイアが住んでいても不思議はない気がする。

……ヴァンパイアっていうよりも、妖精フェアリーさんがでてきそう

流惟はくすりと肩をすくめた。那由多に話したら、中学生にもなつて、と笑われそうだけれど、彼女は『天使』や『妖精』などいうものの存在を信じている。だからサイプリスに自分がヴァンパイアだ、と告げられても、そして驚きはしなかつた。サイプリスを完全に信じたわけではないが、会つてみる価値があるようと思えた。

「先生、すごいね！」

「何が。主語が入つてないぞ」

那由多は意地悪く笑つて、振り返る流惟に答える。その言葉とは裏腹に、彼は目を細めて小道を見渡す。流惟が言わずとも彼女の感動が大きいことは一眼でそうと知れたし、サイプリスに会つことを楽しみにしていることも、那由多にはお見通しだ。

小道を抜けると、そこは広場のようになっていた。ベンチがあつて、そこに金髪の少年が腰かけて読書をする姿が見える。

流惟は少年に近付いて声をかけた。

「あの……サイプリスって人の館は、どこにあるか分かりますか？」

「……君は？」

「あ、あの……サイプリスさんの知人っていうか……彼の招待を受けてきたんですけど、詳しい道を聞いてなくつて……。分かりますか？」

流惟が困ったように問うと、少年は本を閉じて立ち上がった。

「案内します。……付いてきてください」

少年は広場を横切つて住宅街のような場所へ流惟と那由多を案内した。そこに立ち並ぶ家々はどれも大きく、流惟の家の1・5倍は悠にありそうだ。けれどこの高級住宅地の中に、人影はない。

何故か少年に会つてから無言になってしまった那由多と、どうやら無口らしい少年の間を行く流惟は、流れる沈黙を打破するように、声をあげた。

「サイプリスさんも、こんな家に住んでいるんですか？」

「ええ、まあ。この街の外れに住んでいます」

少年はそつけなく答える。流惟は素直に感心した。

「すごい。こんなに大きな家に住んでるなんて。先生の病院と同じくらいの大きさだね！」

「ああ、そうだな」

那由多の返答もやはり、そつけない。彼は少年を凝視したまま何事か考えごとをしているように見えた。

思わず、溜め息がこぼれ落ちる。

「……ああ、あそこでです。あの、高台の上

少年が指差す先に目をやつた流惟は、唖然とした。

まるで中世のヨーロッパにでも建つていそうな建造物。家と呼ぶのにはあまりに大きすぎる、それこそ豪奢なドレスを纏つた人々が舞踏会でも催していくそうな、城。

「あの、サイプリスさんの家つてあれ……ですか？」

流惟は活動が急停止した思考を必死に動かそうとしながら少年に問う。視界に入った那由多も、少なからず驚きをその顔に滲ませていた。

少年が一人の様子に笑いを堪えるように頷く。透けるような金髪が、それにあわせて小さく揺れた。

本当に、何者……？

「それでは、ルイさん……ナユタさん」

怪訝な顔をして建物を見つめた二人に少年が声をかけた。  
「この道をまっすぐに行くと、白い門がありますからそこから入ってください。右側の門柱に触れれば、門は開きます」

少年はほほ無表情に言つと、僅かに目礼してきびすを返した。

「あの……？」

「僕は用事があるので、失礼します」

「そうですか。……ありがとうございました！」

流惟は頭を下げた。少年はその姿に口元を歪め、那由多を一瞥するも、先程きた道を引き返していく。



## C h a p . 3

間近で見ると、サイプリスの館はより迫力があった。威圧感のような重々しい空気が、押し迫ってくる。流惟が思わずかばんの紐を持つ手に力を込めると、後ろから肩を抱きかかえられた。那由多である。

彼は少年が言っていた通りに、右側の門柱に流惟を抱いていない方の手を触れさせた。高さは彼の目線よりも2、30cmほどもある門が、微かに音を立てる。

ギイ  
……

鉄が軋むような鈍い音が響き、ひとりでに開いたそれに、流惟は心臓が早鐘を打ち始めたのを感じた。

「吸血鬼……屋敷」

眩いた途端、足がすくんだ。自分がやるうとしていることは、とんでもないことなのではないか。今会おうとしているのは、限りなく『危険』な人物なのではないか。そんな考えが、今になつて込み上げてくる。

わたしを、殺してください。

サイプリスを死なせてはならない。わたしは、彼と話をしなければならない。

どうしてそう思うのかは分からなければ、不思議と恐怖が吹き飛んでしまった。

「……流惟、」

気遣わしげに顔を覗きこんでくる那由多に微笑んで、流惟は足を踏み出した。

視界の端に赤いものが入り込む。ふわりと鼻をつく甘い香り。流惟は玄関の扉のすぐ横にあるそれを見て、歎声をあげた。

大きく、立派な薔薇。優雅に咲き誇るそれは、風が吹いても揺れることなくそこにいた。

「きれーい……」

流惟は那由多から離れてそれにかけより、顔を近付けて呟いた。

「お気に召していただけましたか」

背後からの声。流惟は聞き覚えのあるその声に、振り返った。

「……わたし、道間違えました?」

田を丸くして問う。　　声の主は、先程道案内をしてくれた金髪の少年だったからだ。彼は艶然と微笑んで首を振る。

「いいえ。　　我が緋薔薇館へようこそ。わたしが主のサイプリスです」

「…………え?」

流惟はますます目を大きく見開いた。愉快そうにサイプリスが笑む。

「こんな田舎まで、はるばるありがとつ。君なら来てくれる信じていました」

サイプリスは言いながら、玄関の扉を開けて館へと流惟と那由多を促す。那由多は警戒するようにサイプリスを見据えたまま、流惟の後に続いた。

館の中は薄暗く静かだった。物はあまり多い方ではなく、家具も必要最低限度のものしかないが、少ない調度品はどこか上品な雰囲気をかもしだしている。

玄関のフロアだけでも、流惟の家半分の広さがあった。

「お腹はすいていませんか？ 昼食を用意させましょう」

サイプリスはきょろきょろと館内を見回す流惟を振り返った。那由多に微笑を与えてやり、すぐに視線を流惟へと戻す。

流惟ははにかみながら言葉を濁した。

## C h a p . 4

「さて、いろいろ質問があることでしょう」

何なりと訊いてください、と笑むサイプリスに流惟は頬張ったクロワッサンを飲み込んだ。

ダイニングルームには大きなテーブルがあり、今は使われていな  
い暖炉と、いかにも高級そうな食器棚が壁沿いに据えられている。  
那由多と一人、隣同士に座る流惟の前にはパンと、サラダと、メイ  
ンディッシュ、スープ、デザート、紅茶がずらりと並べられていた。  
すっかり空腹をもてあましていた彼女には、田もくらむよつなご馳  
走である。

対しサイプリスの前には、紅茶しかない。先ほど、大きな振り子  
時計がちょうど十三回鳴ったばかりだから、もう先に昼食は食べて  
いるのかもしぬなかつた。

「あの、わたしの家に 部屋に、手紙はどうやって届いていた  
んですか？」

流惟はぽんやりとそんなことを考えながら質問をする。

流惟とサイプリスの文通は、間に郵便局も電話回線もインターネット回線さえも介さなかつた。流惟はサイプリスの手紙に返事をかけて机の上に置いておくだけで、少し目を離したときにその返事の手紙がまた届いていたのだ。この不思議なやりとりがなければ流惟は

彼をヴァンパイアだと信じることは決してなかつたに違いない。

「ヴァンパイアは、姿を変えることが出来ます。手紙は主に、鳥になつて届けに行つていました」

「コウモリじゃなくて、か？」

サイプリスの答えに那由多が口を挟む。どうも彼は、サイプリスのことが気に入らないようだ、と流惟は思わず苦笑した。

「あの姿は、意外に目立ちますからね」

サイプリスは気にして様子もなく穏やかな口調で微笑み、続ける。「見知らぬ人間を警戒するのは賢明なことです。しかし、それには毒なんて入つていませんよ」

那由多は、先ほどから一口も食事を口にしていなかつたのだ。早くも不穏な空氣に、流惟は慌てて言葉を探した。

「せんせ、本当だよ？」このパン、すごく美味しいです！」

「……氣を遣うな、ばか」

「ルイのお口に合つたのなら、よかつたです」

かえつてフォローされる形になつてしまつた。頭を那由多に小突かれた流惟ははにかむと、再びサイプリスの顔を見る。

年の頃は流惟つ同じくらいの美少年だが、言動は妙に大人びていた。先ほど彼が言つていたように、サイプリスの容貌は、仮の姿なのかもしぬれない。

## C h a p . 1

「いいか、流惟。俺が呼びにいくまで部屋から出るんじゃないぞ」  
那由多はサイプリスの、館内を自由に物色してもかまわないと  
言葉を受けて、彼の素性について調べに出たのだ。流惟がどんなに  
一緒についていくと主張しても、

「危険だから」「の一点張りで頑として同行を許さない。結局根負け  
した流惟は部屋で留守番をする羽田になつた。」「丁寧にも内側から  
の施錠も義務付けられている。

どうにも那由多せんせは、昔から過保護などいろいろある。そう溜  
め息をついた彼女は、ぐるりと豪華な装飾の施されたベッドに寝転  
がつた。

部屋の中は落ち着いたベージュの家具で統一されていて、下手に  
安いホテルよりも高級感があふれている。広さも十分すぎるほどあ  
り、西側の壁にはベッド、東側の壁にはデスクが据付で置かれてい  
た。

「つまんなーい！」

しばらく大きなベッドの上を転がつていたがそれは暇つぶしにも  
ならない。仕方なく流惟はベッドから跳ね起きると、南に面した大  
窓にぱたぱたと歩み寄った。窓を開けるとすぐに円形のバルコニー  
に出现られるようになつていて。

窓を開け放つた流惟の鼻腔を甘い香が掠める。見れば、窓の下に  
は見渡す限りのバラ園が広がっていた。

「うわあ……すごい……！」

「気に入つていただけましたか、ルイ」

「はい！ とてもきれいですっ！」

声をかけられてバルコニーの下を覗くと、相変わらず穏やかな微笑をたたえたサイプリスが立つていて、流惟を見上げていた。流惟は大きく頷いて笑顔を見せる。

「よろしければ、降りてきて一緒に見ませんか？ バラのアーチがあるんですよ」

サイプリスはバラ園の方を指差して首を傾げる。流惟はわずかに逡巡したが、すぐに首を縦に振ると、部屋を飛び出した。那由多の言いつけを思い出さなかつたわけではないが、退屈を紛らす事の方が最優先であつたし、サイプリスのことをもっとよく知るためにいい機会だと思ったのだ。

## C h a p . 2

「わたし、あなたを殺すなんてしたくありません」

一人で並んでバラのアーチをぐぐりながら、流惟はそう口を開いた。サイプリスはわずかに目を伏せる。穏やかな微笑が崩れることはない。

「殺してもらわなくては困ります ルイ、私を助けてください」「殺すことが助けることだなんて、悲しそぎますよ。ほかに何か方法があるはず」

「もしそんなものが」

流惟の言葉を遮ったサイプリスの声は、ひどく冷ややかだった。けれど向けられた目は柔らかなままであったから、その格差に流惟は少なからず困惑を見せる。

「もしそんなものがあつたのだとしたら、わたしはとっくに見つけていたでしょう。このような身体になつて以来、何も遊んで過ごしてきたわけではないですから。それにそのような方法は、ない方がよいのです」

わたしは罪を償つべくして今、ここにいるのですから。

流惟は思わず泣きそうになるのを押し殺して、彼の横顔を見つめた。サイプリスは何か、深い悲しみに囚われているように見える。それは誰か、大切な人を失つた時のひどく陰鬱とした空気にも似ている、と思つた。

あのときのわたしに似ているんだ、

流惟はふとそう思い、ますます彼を死なせたくない、と歯を噛み締めた。

「さあ、つきました

「わあ……！」

サイプリスの声に我にかえつた流惟は、目を見張つて咳く。アーチを抜けたそこに広がっていたのは緋一色。種類も形もさまざまなバラが咲き誇るその奥には、大小おびただしい数の墓石が見えた。

「氣味が悪いでしょ」「う」

サイプリスが嘲笑する。一步その中に踏み込むと落ちたバラの花弁が舞い、むせ返るほどの香が鼻をついた。

「ここにあるバラの花弁は全て、赤くなるんです。どんな種類のものも植えても、植えた当初はたとえ白くとも、一二三回すると赤くなってしまう」

サイプリスは花弁一枚摘み上げる。流惟は近くの墓に歩み寄つた。

「このお墓はサイプリスさんが……？」

「うん。ああ、でも全部ではありませんけれどね」

サイプリスが微笑する。「じつ、と風が吹いた。赤い花吹雪。

「呪われているんでしょう。この墓の下には、わたしが殺してしまった人たちが眠っているから……だから彼らの憎しみが、バラを赤く染め上げる」

流惟はサイプリスを見た。彼の顔は透けるよつて白い　　否、

青い。具合はよくないのだう。

休んでいなくてよいのか、と問おうとしたが、言葉にすることができなかつた。彼の表情はこの世に別れを告げているようになつて、何も言えなくなつてしまつたのだ。

流惟は手持ち無沙汰になつて辺りの墓を見渡した。ほとんどがグレーの石で作られたもので、正面には横文字でその墓石の下の人物の名が刻まれているようだ。そんな中にあって、ひとつだけ白い墓石が目に留まる。たくさんの墓石の最奥に、それは少しあなれて建っていた。流惟はそれに近づこうと足を踏み出す。

「 痛ッ」

右手の甲に鋭い痛み。見れば、バラの棘で切つてしまつたらしく、少量の血が出ていた。

「 ルイ、大丈夫ですか？」

慌てたように駆け寄ってきたサイプリスは、流惟の手の甲を見るとい、ハツと立ち止まる。見る見るうちに顔は青ざめ、喘ぐような吐息に変わった。

「 サイプリス……さん？」

心配そうに流惟が声をかけると、彼はひとつだけ大きく深呼吸をした。すぐにサイプリスは呼吸を整えると、己のシャツの袖を破つて流惟の手をとる。

「 気をつけてください。あなたの綺麗な肌が傷ついてしまうのはなんとも口惜しい」

壊れ物でも扱うかのような手つきで、彼は慎重にシャツの切れ端を流惟の手に巻きつけた。

「 あ……、ありがとうございます」

「 屋敷に戻つたらちゃんと手当をしますよ。 そう、ナコ

タさんは医者なのでしょう?」

「 はい、わたしのうちの近くの病院の院長先生なんです!」

流惟は誇らしげに頷いて応える。サイプリスは目を細めて口元に笑みをたたえた。

「 素晴らしい まだ若いのに」

「 先生は、本当に優秀なお医者さんらしいです。おうちも何代も前からずっと医者の家系らしくて」

すごいですよねえ、と繰り返す流惟にサイプリスが頷いて見せれば、自分のことを褒められたかのように顔を綻ばせた。

「ルイとナコタさんはずいぶんと親しいようですが、お付き合いは長いですか？」

「わたしがまだ幼稚園のころ　　わたし、交通事故に遭つて、那由多せんせのおうちの病院に運び込まれたんです。そのとき、先生はまだお医者さんにはなつてなかつたんですけど。わたしに輸血をしてもらつて」

少し照れくさそうに笑つた流惟は、

「だから」とはにかんだ口で続けた。

「先生つてば、ずっと過保護なんですよ。わたしの親なんかよりずっと心配性で！」

「ルイは大切にされているんですね」

サイプリスはそう言うと、すっと手を伸ばして流惟の髪を梳く。その仕種は実に自然で、流惟は頬が熱くなるのを感じた。サイプリスは羨妬目なしに美しい顔立ちをしていて、思わず見惚れてしまう。彼の金髪は陽光に透けてかがよつており、時折吹く風になびいていた。　容貌はそう、天使のよう。

「わたしが血をもらつたのは、那由多先生だけじゃないらしいんですけどね」

「…………と言いますと？」

サイプリスに促され、流惟は頷いて続けた。

「わたしが事故に遭つたときに居合わせた人が、病院までついてくれたらしくて。ちょうどその日は前日に他のオペがあつて、わたくしと同じ血液型の血が足りなかつたらしいんです。那由多先生のだけでは足りなくて、その人も血を分けてくれた、と聞いています」

流惟はサイプリスを見た。その手術に立ち会つた看護婦によれば、それは色が白く、絵画の中から抜け出たように美しい青年で、物腰も柔らかく文句のつけようがない人だつたらしい。

なんだかサイプリスに似ているな、と流惟は胸臆でそんなことを

考えた。

サイプリスはさうしてか切なげに田代を細めて流椎を見つめると、

「傷は、」

「え?」

「その事故で負った傷は、残つたりはしませんでしたか?」

言いながら髪に触れてくる彼の、右の手のひらにある痣は、バラの形に似ている。

「額に少しだけ残っていますけど、ほとんど見えません。あの、サイプリスさんは、その痣……」

「これですか?」

サイプリスは流惟に右手を差し出した。それをまじまじと見つめた流惟は頭の上で、彼が笑つた気配を感じる。

「わたしがヴァンパイアとなつた証……でしょうかね。わたしはこの痣を負つた日に、このような罪深い身体となつたのです」

そう言つた声は自嘲じみていたけれど、彼の目はひどくじめじげに口のひらを見下ろしていた。

## C h a p · 3

そろそろと部屋に戻ってきた流惟が真っ先に見たのは、かつてないほど不機嫌な顔をした那由多だつた。彼は流惟のベッドに腕組みをしながらその長い足を組んで座つていた。それはまるでモデルか俳優のように実に格好が良かつたけれど、だからこそ、恐ろしい。

「あ……、ただいまー、せんせ」

「流惟、」

殊更明るい声音に那由多は立ち上ると、つかつかと大股で、ゆっくり流惟に歩み寄る。

「あ、あの、ごめんなさ　　」

謝つたが勝ち、とばかりに慌てて頭を下げようとする流惟は、皆まで言い終わらぬうちに那由多に頬を引つ張られた。

「ひ、ひえんひえ？」

「俺の言葉をもう忘れたのか」

怒鳴られるかと思つたけれど、存外静かな声で那由多は言つた。流惟は動かない首を振つて彼の顔を見る。

「どれほど俺が心配したと思つてるんだ」

「ほ……ほふえんははひ」

しゅんとして謝ると、ようやく頬をはなされる。流惟は両手で頬をさすりながら、恐る恐る彼を見上げた。

「まったくお前は、昔からすぐ無理をして」

「『めんなさい。……でも、わたし、もつとあの人を知らなくちゃ

いけないって思つたから……、」

流惟の言葉に、那由多の眉がピクリと動く。

「それで。何か分かったのか、あの化け物について」「サイプリスさんは化け物なんかじゃないもん。先生のことも褒めてたし」

「何の話をしているんだよ……」

那由多はあきれたように溜め息を吐き出して、眉間にしわ寄せた。けれども纏う空気は一瞬にして柔らかくなる。

「先生は何か見つけたの?」

「ああ、」

那由多は部屋に入るよう流惟を促しながら頷いて、眼鏡のフレームを指でツイと押し上げた。

「三階の一一番奥の部屋は、研究室のようだつたな。ただしアナログな器具ばかりだつたが」

「研究室つて、何の?」

「それは分からん。ひととおり見ただけだつたからな。医療器具も思いの外揃つていたが……あいつは自分が医者だと言つていたか?」

那由多に問われた流惟は、そういえば自分のことばかり話してサイプリスのことは聞いてなかつたなと思つて至る。彼が何処の国人なののかさえ聞いていないのだ。

もう一度ちゃんと話さなくては、と考えていると、那由多がベッドに腰を下ろしながら流惟を手招きした。素直に彼の前に立てば、両の頬に手が伸びてくる。また引つ張られるのはごめんだ、と流惟は慌てて自分の頬を押された。

那由多は呆れたように、ぱーか、と笑いながら流惟の手の上から己の両手を添えて、彼女の瞳をしっかりと見据えて口を開く。

「もうじつといふなんて言わない。言つても無駄だろうし。だからせめて、俺に一言言え。お前に何かあつたら、親御さんに合わせる顔がなくなる」

「……何かあったら、ちゃんと先生を呼ぶよつります」

「よし。いい子だ」

「また子供扱い！」

白い歯を見せた那由多に、流惟はむうと口を尖らせた。

「流惟が心配だから言つていいんだ。子供扱いなんてしてない。そもそも、」

流惟の前髪をかきあげて額に触れた那由多の指は、静かに彼女の髪の生え際の、うつすらと残る傷跡をなでた。肌の上を滑る指がぐすぐつたい。

「子供だと思っていたら、こんなところに來るものも反対したよ」

穏やかなバリトンの声は耳に心地が良くて、流惟は先程の憤慨さえどうでも良くなってしまった。

「……あのぉー、入つてもいいですか？」

流惟はサイプリスの部屋のドアの前に直立して声を張り上げた。今しがた部屋を出てきたときには、時計は午後十時を示していた。午前中に見つけた研究室にいく那由多と一緒にここまで来たのだから、今回は叱られる心配もなかつた。その研究室とサイプリスの部屋とは、同じフロアにある。

「なぜ」

ドアの向いから返答は、あまりにそつけない。流惟は一瞬戸惑つて、

「たいした理由はないんですけど……あんまり、あなたのことを聞いていなかつたなあと思って」

「明日ではいけませんか？ もう夜も遅い」

「あの……」めんなさい。迷惑でしたよね。やつぱり、明日でいいです」

あつさつと引き下がるより他なかつた。まさか、本当は一人でいるのが恐いだけだなんて、言えるはずがない。部屋に入れてもうれたところで、何をしようつといふわけでもないのだ。

「……ルイ」

おとなしく部屋に戻るつとしたとき、再びサイプリスの声がした。

「夜は、我らの力が最も強まる時間です。わたしを殺すのなら、昼間にしてください。暗闇の中では、わたしも自分を制御しきれない

「ことがある」

殺しに来たわけではないのに。流惟は小さく溜め息をつく。

「サイプリスさんは、寝ないんですか？」

「わたしは夜行性ですからね。夜はむしろ目が冴えます」

「じゃあ、少しお話しませんか？　わたしはここにいるので。わたしも今は、目が覚めてるんです」

言つて流惟は扉の前に座り込んだ。サイプリスは応えない。けれど、中で微かに笑つたような気配がした。

「サイプリスさんは、何年くらい日本にいるんですか？　日本語上手ですよね」

「そうですね、日本には百年くらい。まだ日露戦争が終結して数年たつたばかりの頃でしたから、」

さらりと言つサイプリスに、流惟は目を丸くした。ヴァンパイアである彼が長生きであるのは予想していたが、こうもさらりと言わると返す言葉もない。しかもサイプリスの容姿は自分と同じくらいの少年だというのに。

「……ちなみに他の国にもいたんですか？」

恐る恐る聞いてみる。

「一番長いのは、実は日本なんですよ。あとはイギリスかな。わたしの母国ですし」

イギリスかあ。流惟はのんびり、胸中で呟いた。おおよそ予想通りだったが、日本がもっとも滞在期間が長い国だとは意外だった。

「あとは、フランスとドイツとアメリカ……中国にもいたことがあつたかな」

「あのー……サイプリスさん、お幾つなんですか？」

「五三十年ほど、ですかねえ。これでも短いほうなんですよ。わたしの知り合いには、去年六百歳を迎えた方もいらっしゃいますから、頭痛がした。あの少年の容姿で百三十歳です、だなんて、冗談でも言つてほしくはない。事実だから仕方がないのだけれど。」

「でも……百三十年も生きてきたのに、どうして今、死のうと思つたんですか？」

「ルイは、永遠の命がほしいですか？」

聞き返されると言葉に詰まる。

確かに死ぬことは怖い。でも人間はいつかは死ぬものだ。年齢を重ねて生きしていくことで、死が近くなつたころには恐怖など消えてしまうのではないかだろうか。そうなればむしろ、永遠の命などといふものは、寂しいばかりではないだろうか。サイプリスはその寂しさに、耐えられずにいるのかもしれない。

「終わり人生が、必ずしも寂しいものであるとは限らない」

サイプリスは流惟の考えを見透かしたように言つ。じゃあ何で、と流惟は首をかしげた。

「多くの人と出会い、その死に日に遭いました。でもそれは、人間だつて同じでしょ。人間よりも少しその回数が多いだけ」

少しというのは誇張表現であるように思えたが、流惟は何も言わずに彼の言葉を聴いていた。

「わたしが生きていれば、罪が重なるのはどうしようもないことです。人を襲わないように部屋に閉じこもつても……夜が来ると、意識がなくなる……苦しくて、苦しくて、意識を失つて……気がつくとわたしの手は、赤く染まっているんです。冷たくなつた人間が、虚ろにこちらを見ているんです。どんなに絶とうとしても、わたしは食事を止めることができない……つ、こんな身体、自ら望んでなごいなかつたのに……！」

流惟は静かに目を閉じた。自分が生きていること自体が罪であるということだが、どれほどのかなりの苦しみであるかなんて、想像すらできなかつた。

「この苦しみはかりそめだから　　夜になると、姿は戻つてしまふんです」

喘ぐような声に、流惟はドアに歩み寄る。

「サイプリスさん？　大丈夫ですか？」

「何……毎夜のことだ……痛みには慣れていますよ」

サイプレスの声のトーンが低くなる。言葉の終わりを紡ぐころには、すっかり声変わりした青年ほどの低さになっていた。

「あと四日……」

青年サイプレスが呟いた。

「お願いですから、あと四日でわたしを殺してください。そうじゃないと……」

サイプレスはそこで口を噤む。続きは聞くまでもなかつた。流椎は田の前の、古ぼけたドアを見つめる。

殺されるかもしれないという事実が田の前にあるといふに、サイプレスを殺す気にはなれない。むしろ死なせてはならないとその思いは、とどまることを知らない。けれど方法がわからないのだ。そもそも死以外に彼を苦しみから解き放つ手はあるのだろうか？

## C h a p . 5

真つ暗な部屋に風が吹き込む。白いカーテンが揺れる隙間から、蒼い月光が部屋を照らしていた。

流惟は扉の近くに立っていた。ここがどこかの部屋であるかは分からぬ。ただ、窓の傍らに立つ人影を凝視しているのだった。

月光がその人物の顔を舐める。艶やかな金髪、憂いを帯びた美貌。西洋的な顔立ちをした青年だった。見知った姿ではなかつたが、流惟はその青年がサイプリスであると直感する。伏しがちな目や、雰囲気がそつくりなのだ。

青年は流惟のことを見ようともせず、ベッドの中の人物に目を向けていた。安らかな寝息を立てるのは、日本人の若い男性であるようだつた。

突然、サイプリスが体をかがめて日本人の顔を覗き込み、その首筋に顔をうずめる。流惟が立っている位置からはそれが首筋であるとかさえよく分からなかつたが、耳元で何かを囁いているようでもあつた。

( .....え? )

流惟は目を丸くして二人を見ていた。声を上げたはずだが、聞こえていないらしい。

「 .....んー ..... ? サイプリス ..... ?」

青年が半身を起こす。サイプリスは答えない。

「まだ、夜中じゃないか ..... 。寝かせてくれ」

寝ぼけた声で言つ青年を、サイプリスは無言のまま縋りつくよう

に抱きすくめる。青年は慣れているのか、泣いている子供をあやすようにサイプリスの背を軽く叩いた。

そんな動作から目を離せなくなつて、流惟は、はつと我に返ると、慌てて一人に背を向けた。なんだか見てはいけないものを見てしまったような気まずさが広がる。部屋を出て行こうとアーノブに手をかけた。

でも、あんな人、この屋敷の中にいただらうか？

流惟がそう思い直して振り返ったところに、青年のわめき声が響く。

「サイプリス……っ！　田を、覚ませっ！」

ひどく緊迫した聲音に、思わず数歩歩み寄つた。その鼻に届く、つんと鋸びた臭い。

(　……？)

何が起きているのか分からなかつた。一人の体勢に変わりはない。サイプリスが青年を抱きかかえて首筋に口を寄せている。ただし先程までは聞こえていなかつた、ずず……、と何かを啜るような音だけが、その静寂にまぎれていた。

(　さ……、サイプリスさん……？)

流惟が立ちぬくしたまま声をかけるが、サイプリスには聞こえていないようだつた。振り向くことさえ、ない。

何かを啜るような音だけが、いやに大きく、聞こえた。

いつまでそうしていただろうか。それまで絶えず鼓膜を震わせていた音が、なんの兆しもなくぴたとやんだ。

「…………リヨ、ウ？　リヨウ…………？」

サイプリスがか細い声で呟く。青年が、彼の腕の中からずるりと

床にくずおれる。

青年の胸元は、赤く染まつていた。

サイプリスはようりと力なく後ずさつて、不意にこちらを見た。真っ赤に染まつた口と、緋い雲の滴る顎。そして、だらしなく開いた口唇の向こう側にひびついて、

鋭い、  
牙。

40

「ああああああ」

流惟は自分の悲鳴で目を覚ました。

夢だ。とても生きしい夢。

心臓が早鐘を打つていて、あのサイプリスの吸血鬼の顔が脳裏から離れない。

呻き声がする。サイプリスの部屋からだ。

—サイフリスさん……？

流惟は立ち上がり、扉に歩み寄る。いつの間にかけられていた毛布が床に落ちる。ドアがわずかに開いていた。

「大丈夫ですか？」

「来るなッ」

大音声に、流惟はその場に立ち竦む。夢に出てきたあの金髪の青年が、苦しそうに体を折つてもがいていた。

「でも……！」

「ルイ……ッ、今、すぐ……部屋に戻りなさいッ、早くッ」「苦しいんですか？ サイプリスさんっ」

「早く……逃げろッ」

サイプリスは流惟を突き飛ばす。

「流惟つどうした！」

声を聞きつけたのか、那由多が息を切れして駆け込んできた。

研究室の壁の本棚には、所狭しと書籍が並べられており、机の上には埃を被ったメスやら試験管やらが整頓されて置いてあった。埃を被っているとは言つても、こまめに掃除されている形跡はある。那由多は本棚に歩み寄つて、無作為に一冊を抜き取る。背表紙には『一九一五』一九一七年六月』とある。

( カルテか……？ ずいぶんと古いな…… )

黄ばんだページを来ると、人名と日付、病気の症状が一覧表になつていた。

やはりここで、医院か何かを開いていたようだ。一覧は全て日本語で、それも細筆で書かれている。サイドプリスが書いたにしては、違和感が先立つ。

最後の患者の欄には一九一七年六月十四日と日付があつた。

ページはまだ残つているのにも関わらず。

ふと顔を上げると、本棚の、那由多の目線より少し高いところに位置した段に写真立てが置かれていた。

写真は白黒であり、二人の青年が写つていて。一人はワイスシャツに白衣姿の日本人で、穏やかで人の好さそうな笑顔をこちらに向いている。彼の右腕は、隣に立つ西洋人の肩に回されていた。西洋人は軍服を身に纏っているが、その厳つい服装にはおよそ不似合いなほど柔らかな微笑を見せてている。

「この男……、」

那由多は西洋人の顔に視線を留めたまま、どこかで見た顔だと記

憶を手繕る。写真立てから写真を抜き取つて裏を見た。そこには『一九一七年六月十四日 サイプリスと、叶医院前に』と走り書きされていた。

( 叶? )

「己と同じ姓に、那由多は怪訝そうに眉をひそめた。単なる偶然だろう、とは思うが、全く気にかからないと言つては嘘になる。

そしてやはり日にとまるのは、一九一七年六月十四日という日付。写真が撮られ、この日を境に宅診記録が途絶えているのは、これもまた偶然の一致なのだろうか?

\*

『 リョウ 』

ドアが開く気配に続いて、そんな声がする。見れば、『写真の中の西洋人が一人分のティーカップを盆に載せて立つていた。

『ああ、サイプリス。もう少しで終わるから少し待つていてくれ』すぐ隣で男性の声が言うので、那由多は驚いてそちらに視線を移す。無人で埃を被つていたはずの執務机に、白衣を着た青年が座つていた。

( どういうことだ? )

戸惑つて辺りを見渡すと、部屋の中の様子も幾分関わっていることに気がついた。家具の配置は変わっていないが古ぼけた、黒くさい印象はなく、全体的に明るさが満ちている。また何より、夜闇だったはずの窓の向こうから、あたたかい陽が入り込んでいた。

『あまり無理をしそうると身体に障るよ、リョウ』

サイプリスと呼ばれた青年(写真とは異なり軍服ではなく、ワイ

シャツの上に黒いベストを着ていて、（手近にあつた机の上に紅茶の載つた盆を置くと、大仰に肩をすくめながら日本人の青年、リョウに近づいていく。その姿は那由多が知っている『サイプリス』のそれとは、ひどくかけ離れていた。

サイプリスはリョウの座つたアンティークチェアの背もたれに寄りかかって、彼の手元をのぞき込んだ。二人には、すぐ側にいる那由多が見えていないらしい。

『それほどヤワじゃないよ。俺は医者だしな』

『そう言いながらこの間、風邪を引いたばかりだ！』

『医者の不養生だってか？　お互い様だよ、それは。お前だって王室付き軍人のくせに、優しすぎて、人一人殺せやしないじゃないか』リョウはにやりと人の悪そうな笑顔を浮かべてサイプリスを見遣る。対しサイプリスも、苦笑してわざとらしく肩をすくめた。

『これは驚いたな。命を救うドクター殿から、人を殺せと言われるなんて！』

『言つていないよ。優しさがあつて初めて、君という人間が構成される、だろう？』

『人間……、わたしはまだ、人間なんだろうか……、』

突然暗さを帯びた声に、リョウが怪訝そうな顔をした。椅子をくるりと回してサイプリスを向き、真顔を作つて言う。

『村の奴らの言うことは気にするな。彼らは弱い。だからこそ、人種の違うお前を恐れているだけだ』

『しかしわたしは、現に人の血を……、』

『サイプリス』

苦しげに言葉をつむいだサイプリスを遮るようにしてリョウが声を上げる。サイプリスは眉根を寄せたまま口を真一文字に引き結んだ。

『お前は俺の患者だ。歴とした人間の。決して化け物などではない。違うか？』

『……ああ、　　そのとおりだよ、リョウイチ』

サイプリスの顔が歪む。リョウは静かに立ち上がった。

『ところでサイプリス、写真館の主人は何て？』

『午後四時になると、言つていたよ。しかし珍しいな、写真嫌いの君が写真を撮りたいだなんて！』

一人で連れ立つて部屋を出て行こうとするのを、那由多は混乱した頭を忙しく巡らせながら見ていた。

『まあね。……サイプリス、今月に入つて一人、という数字に覚えはあるか？』

『ん？ なんだ、それは。クイズか？』

\*

ふと氣づくと、那由多は本棚にもたれて座り込んで眠つていた。今のは夢か、と軽く頭を振つて立ち上ると、黒いスラックスが白く汚れているのが目に映る。

埃をはきながら、夢でリョウが就いていた執務机に歩み寄つた。その上にきれいに積み上げられた紙は右肩を紐で括られ、表紙には毛筆で『人間における吸血行動』と題字が書かれてある。サイプリスとリョウが話していたのは、サイプリスの吸血行動についてなんか、と手に取つた。

「 きやあああ！」

ドアの外からの悲鳴。間違いなくそれは、流惟のものだ。

「 流惟っ！」

那由多は息を飲んで研究室を飛び出した。心臓がいやに高鳴る。サイプリスの部屋は研究室の三部屋隣にあり、研究室から廊下に出ればすぐ見える位置にある。開け放たれた扉の前には、無造作に落ちた毛布があった。

「流惟ッ、どうした……っ！」

肩で息をしながら部屋に飛び込むと、蹲つているサイプリスと、そのすぐ傍らに跪いている流惟の姿が目に映る。

「せんせえ……っどうしよう、サイプリスさんが！」

振り向いた流惟はすっかり落ち着きを失っている。那由多は彼女を下がらせ座り込むと、サイプリスの脈をとった。脈はない。

「ちッ、本物か！」

舌打ちをし、那由多は流惟を振り返る。流惟は不安そうに、青ざめた顔をしていた。

「流惟！」

「は、はい！」

「俺の部屋から鞄を取つてくれ。できるだけ急いで！」

「わ……わかった！」

流惟が返事をし終わらないうちに部屋を出て行くのを見ると、那由多はサイプリスに再び視線を落とした。昼間は少年の姿をしていて彼だが、今は那由多と同じ程か、少し年長くらいの青年の姿をしている。それは先程写真の中で見た西洋人の姿であり、夢で動いていた青年その人だった。

「は……あつ、何をしている……、君も早く……！」

「黙つてろ。噛みついたりしたら承知しないからな」

那由多は冷たく言い放ちながら暴れるサイプリスを足で押さえつけた。

「あと四日じゃなかつたのか」

「まさかこんな……っ、早いとは……っ、」

サイプリスは拳を握りしめながら絶え絶えに答える。力を込めすぎた手のひらには、爪が食い込んでいた。

「先生、鞄！」

流惟が駆け込んでくる。那由多は彼女が持ってきたかばんの中からエタノールを取り出して手を消毒し、腕を縛つて注射器を取り出した。

「流惟、なんかその辺りに容器がないか」

「え……っ、あ、マグカップなら！」

那由多は己の腕から血を抜き取ると、それを流惟が差し出したマグカップに移し替えて、サイプリスの口元にあてがつた。

「サイプリス、飲め！」

「はやく……っ、逃げろと！」

「サイプリスさん！ 飲んで！」

流惟が言い、サイプリスは荒い息で一気にそれを飲み干した。

「大丈夫……？」

「う……、リヨ……ウ……？」

サイプリスは那由多の顔を見て呟くと、それきり意識を失った。

1

「う……」

サイプリスの小さな呻き声を聞きとがめた那由多は、読んでいた書物から顔を上げて彼を寝かせたベッドに歩み寄った。

「目が覚めたか、吸血鬼」

サイプリスの腹の辺りにはベッドサイドに座つた流惟の頭がある。かすかに寝息を立てる彼女の肩には、毛布が掛けられていた。

「……迷惑をかけてしまったね」

「まつたくだ。貧血の上に寝不足だぜ、こっちは」

半身起こしながら詫びるサイプリスに仏頂面をむけてやると、那由多は言葉を選ぶように眉をひそめた。その間を縫つて、サイプリスが口を開く。

「叶綾かのゆなづち」といふ男を知つてゐるか？」

那由多は目を丸くした。何を隠そう彼が聞くことを躊躇していたのはその人物のことだつたのだ。

「俺の曾祖父ひいじいさんだ。やっぱり、『リョウ』つてのは」

「君の血を飲まれた時、すぐに気づいた。幾分か薄くはなつていなければ、確かにリョウの味がした」

「化け物め……」

那由多は苦々しく顔をしかめると、眠つてゐる流惟のすぐ側に立つて、サイプリスを見下ろす。ひどく冷ややかな瞳だつたが、サイプリスは何が可笑しいのか薄ら笑つた。

「そういう顔 リョウにそっくりだ。よく言われるだろ?」

「さあな。曾祖父さんの話はほとんど伝え聞いていない。優秀な医師だったらしげが、出張中に病死した、って程度だな」

「……リョウはね、この町に来ていたんだ。単身でやってきて、小さな診療所を開いていたのだけれど、私と親しくなつてからはこの緋薔薇館で暮らしていた」

素晴らしい医師だったよ。

微笑むサイプリスの視線は確かに那由多に向いていたが、彼を見ているわけではないようだ。那由多ではなく　　彼の顔に僅かながら伺える『リョウ』の面影を見ているのだ。

「私が町の連中に避けられ、忌み嫌われた折も、彼は決して私を見捨てようとはしなかつた。変わらず接し続けてくれた　　それが、どんなに嬉しかったことか」

「曾祖父さんに会った時、あんたはもう吸血鬼になつっていたのか」「難しい質問だな　　半分はそうだったが半分は違つた、というのが無難かな？」

サイプリスは自嘲じみた表情を浮かべてそこでいつたん口を噤むと、すぐにまた形の良い唇を開いた。

私は英國の王室付き軍人だった。階級は大佐。元来争いごとは好きではない性分ではあつたが、順調に出世し、人並みの幸せは持っていた。日本に来たのは日露戦争が終結したばかりの頃 仕事ではなくて、ほんのバカニスの気持ちだったのじゃないかな。この町に居住することにしたのだつて、大した理由ではなかつたようだと思つよ。今となつては、覚えてさえいないのだから。だが、軍人としての生活に疲れてしまつた、という理由も多分にあつただろう。

私はこの町に來たばかりの頃は別として、出来うる限り人と接することを避けていた。言語の壁があつたことはもちろんだが、私に向けられる好奇の色に、閉口してしまつっていたんだ。この姿容だからね。けれども私は人が好きだった いつもいつも、屋敷で一番見晴らしの良い、この部屋の窓から町の人々を見ていたよ。

私がこの町に来てから十年ほどして、ふらり（・・・）とやつてきたのが、リョウだつた。小さな町だつたから、医者は隣町にしかいなかつたんだ。だから、彼はすぐに町の人たちからの信頼を手にし、一目置かれる存在になつていた。魅力的な男だつたしね。

かくいう私もまた、彼の魅力に惹きつけられた内の一人だ。私とリョウは、いい友人になつた。リョウは私を「外国人」としてではなくて一人の人間として扱つてくれた。私は多忙なりョウを度々晩餐に招いたり、時には診察の手伝いをしたこともあつた。依然町の人間と接するのを極力避けていた私にとつては、彼といつも時間は唯一の娯楽であり、同時に安らぎであつた。

\*

\*

\*

ちょうどその頃からか、町には不穏な空気が流れ始めた。女学校に通う少女が、ひどい殺され方をしたのだそうだ。私はそれを、現場に立ち合つたりヨウから聞いた。

彼は、忙殺的な日々を送らねばならなくなつた。通常の診察に加えて、その女学生の死因の解明を一手に請け負つていたから。私は見ていられなかつた

彼は食事どころか、睡眠さえろくに取つていらないなどとやつれた顔で言うのだからね。何か私に出来ないことはないか、と訊いた私は、

ほど利己的な人間もないだろうと思っていたが、そのように献身的な考え方を私に抱かせたのは、リヨウによる精神的な救出に他ならないとも思つていたのだ。けれどもリヨウは、君に迷惑は掛けられない、と言つ。まったく水臭い話さ！ 私がどれだけ彼に救われたのか訴えると、彼は照れを隠すように苦笑して、それじゃあ君の館に住まわせてくれないか、うちはどうにも手狭で、と肩をすくめて見せた。戸惑うのは今度は私の番だ。予想をしていたのは全く反対の事態だつたことがあるが、私は自分で御することの出来ない困つた性癖を思つて、答えに躊躇したのだった。

性癖、というよりは病気と言つた方が適切かもしれない。

\* \* \*

その症状が現れだしたのは私が一十五の時だつた。軍で訓練をしていた折に怪我をした部下がいてね。私は彼の傷口から滴る鮮血が何故だか無性に、飲みたくてたまらなくなつたのだ。愕然としたよ。私にはそのような嗜好はなかつたし、それが異常だとも分かつっていたからね。私は知り合いの医者に秘密裏に輸血用の血を分けてもらつて、自らの途方もない欲求を宥めていた。

秘密というものは、得てして隠そとすればするほど何処からか漏れ出すものだ。私は次第に、部下たちに「ヴァンパイア」や「吸

血将校「などと呼ばれるようになった。」啜血「はしても、断じて「吸血」したことはないのだけれどね。この症状は、どうやら精神が鬱状態になると発症するらしくてね。日本で暮らすようになつてからは、ストックの血を飲んでいたんだが、それも底を尽きかけていた。

リョウのお陰で症状はずいぶんマシになつていたとは言え、万が一、発作が出ないとも限らない。私は、それが恐ろしくてならなかつた。彼もまた、部下たちのように私を化け物扱いするのではないか、とね。リョウから町の人々に私のことが漏れ、町を追い出されるのを恐れたのではない。たとえ私が病氣について告白しても、彼は決して口外しないだろうと信じていた。その頃にはリョウは私にとって、誰よりも信頼できる人間となつていたからね。

こそ、私は恐れたのだ。

私はさんざ迷つた挙げ句、全て事情を話してリョウの病院の輸血用血液を分けてもらつことで、了承しようとした。リョウは、病院の血は与えられないと言つた。代わりに俺の血をやる、と。驚きはひとしおだつた。氣味悪がられて当然だと思つていたし、最悪の場合、町を出ることも考えていたからね。

(　　俺を信じて打ち明けてくれたお前を裏切りはしない。お前は今この瞬間から、俺の患者だ。)

リョウは私の家に移ると同時に、私のために、人間の吸血行動についての研究を始めた。その頃から、町の女学生が更に殺害されることが続いてね。月に二、三回のペースじゃなかつたかな。町は痛いほどの緊張をたたえていた。男たちは夜通しで巡回をし、女学生がいる家を中心に警備を固めた。それでも、犠牲者は増えるばかりだった。

吸血鬼がこの町のどこかで息を潜めているのだとまことしやかに囁かれるよつになつた。その上、疑心暗鬼が広がり、一度は私を受

け入れた人々も私を避けるようになつていた リョウを除いて、  
ね。もちろん町の人私が私を回避したのは「病氣」の所為ではなくて、  
この金髪碧眼と言語のためだつた。当時の私の会話にはまだ日本語  
と英語が混在していたからね。私はそう知つていたけれども、まる  
で化け物扱いをされている そう、軍にいた頃のように  
と気が気ではなかつた。だけれど、リョウは私を支え続けた。それ  
がなかつたら、わたしはきっと折れてしまつていただろう。

\*

\*

\*

そんな折、リョウの元へ一通の手紙が届いた。彼が言つには、困ったことが起きたから至急戻つてきてほしい、という彼の妻からのものだつたらしい。リョウは仕方がないから三、四日屋敷を離れる、とその場で告げた。六月十四日のことだ。至急の手紙をもらつたと、うのにリョウはその日には発たなかつた。午後などは写真師を呼んで、私とリョウの二人を写真に撮らせた。急がなくてもよいのかと私が問うと、彼は如何にも樂觀したように構わない、と肩をすくめた。何故突然写真を撮ろうなどと言い出したのか、とまた私が聞えば、リョウはしげしげと私を眺めて、友情の証さ、と笑いを堪えるのだ。

結局リョウが必要最低限の荷物を持って町を出たのは十六日の朝だつた。駅までは馬車で半日はかかる。そこから東京までもう半日。彼が帰つてくるのは、早くとも十八日だらうかと思われた。リョウがいない時間はひどく退屈だつた。私は丁寧にも彼が取り置いていつてくれた血を舐めながら、何度もそう思つたことが分からぬ。

\*

\*

\*

十七日の夜は、ひどく蒸し暑くて過ごしにくかつた。小雨も降つていたようだ。

私が丁度毎晩のように「啜血」をしていたとき、屋敷のチャイムが鳴り響いた。私が玄関に出ると、町の人間が八人ばかりすれも屈強な男性ばかりだつたが立つていた。男たちは初めにリョウは不在かと訊いた。東京に行つてゐる、と答えてやると、彼らのうち一人が診療所に忘れ物をしたのだが、施錠されていて困

つていて、開けてくれないかと頭を下げた。もちろんこのようなこともありますかとリョウは私に鍵を託して行っていたし、断る理由もなかつたため、私は彼らにそこで待つてているように言い置いて屋敷の奥へと下がつた。

鍵を手に町人たちの所へ戻ると、先程頭を下げた男が、私が飲みかけたままダイニングルームに置いていた血を突きつけた。これは何かと訊かれたが、血だとしか答えられない。見れば分かるのだからね。まさか飲んでいたとは言えないから、リョウの研究の一環だと答えた　　が、その時には遅かつたようだ。

弁明しようと彼らに歩み寄った直後、私は後頭部に強い衝撃を覚えた。一人が奥に潜んでいて、背後から私に迫つていたのだろう。不覚を取つた、と舌打ちしつつも、私は床に膝をついた。しかし、退役していたとはいえ、私も元は歴とした軍人だ。無抵抗に殺されてしまうつもりはさらさらない。

誰かが娘を返せ、吸血鬼！　と叫んだ。それが合図となり、彼らは私に肉迫してきた。私は片手で頭部を庇いながら、あまり得意ではないけれども体術で応戦した。そうするより他はなかつたのだ。銃もサーベルも、すべて三階の自室で埃を被つていたのだから。

男たちは各自手に包丁だの斧だのを握り締めていた。彼らがご丁寧にも教えてくれた話に因れば、彼らの殺された娘や妹たちと同じように、犯人である私も切り刻んでくれるのだという。

「冗談じやない、と私は遠くなる意識を何とか保ちながら息を吐いた。とんだ濡れ衣だ。そもそも切り刻んでしまつたら飲める血の量も減つてしまふのだから、吸血鬼がそんなことをするはずがないだろうとも思った。追いつめられていた割に、ずいぶんと冷静な思考をしていたものだよ。けれどもそれをそのまま彼らに伝えることが出来たならば、状況はいくらか変わつていたのかもしれないね。

町の少女たちを何故殺した、とひときわ若い声が訊いた。他の男たちのそれと比べて幾ばくか友好的ではあつたものの、刃渡り五、六十センチメートルはあるかというナイフを手にして私に突きつけ

ていたのだから、その好意が上辺だけだということは明白だつた。

私は違うと答え、彼らを見上げた。私に落とされていした視線はいずれも獰猛で、彼らの方がよほど化け物じみている。ともあれあがら骨をはじめとする全身の骨を折られていくこの状況下ではそれ以上の反論をする氣にもなれなかつた。

流れ出る鮮血と共に力が抜けていき、意識までも私から離れていくつとするのだ。どうにも苦しかつた。いつそひと思いに殺してくれればよいものを、あえて急所は外されているものだから始末に追えない、と吐き捨てた。

睨み上げることで抵抗の意志を示した私に、男たちが次の手を考えようとしたときだ。玄関の外で馬車が止まる音がし、それに男性が何やら話している声が続いた。

嗚呼また増えるのか、と私は目を閉じた。その状況で、助けを期待するほど樂観的な思考は持ち合わせていなかつたからね。

外れるのではないかといふほど勢いよく開け放たれたドアの前には、男性が一人立つていて。はじめ私は、それが誰なのか分からなかつた。というのも、私は男たちによつて組み敷かれ、絨毯敷きの床に這いつくばる体勢をとらされていたために、それが男性で、黒いスラックスの裾の所々に泥がはねていると言つことしか確認できなかつたのだ。

男性はドアの前に立ち止まつたまま、呆然とした声で町人たちに何をしているのかと糾した。その声には確かに聞き覚えがあつた顔を少し持ち上げて男性の顔を捉えた私の瞳は、安堵が満ち溢れていただろう。

男性はこちらに駆け寄り、私の身体を抱きかかえるように仰けた。それから再び、今度は更に強い口調で彼らを糾した。町人たちは突然の乱入者に驚きが見せたが、すぐに開き直つてこいつは少女たちを殺した、と喚いた。続けて何故吸血鬼を庇つている、と聞き返す。男性は　　リョウは、サイプリスが吸血鬼であるはずがない、と低く押し殺した声で言つた。そこには今まで聞いたことのな

い、一種残酷ささえ伺わせる冷ややかな響きがあり、私でさえこれは本当にリョウなのだろうかと、疑ってしまったほどだ。

けれども私にとって、リョウが帰ってきたという事実は、名状しがたい安堵をもって張りつめていた緊張さえも解したのだった。

私は目を閉じた。リョウと男たちが言い争う声が、ひどく遠くに聞こえたのを覚えている。

\* \* \*

目が覚めたとき、私は酷く喉が渴いていたことに気がついた。砕かれたはずの骨々はすっかりくつついたようで、体を動かすのに伴う激痛もない。一体どれほど長く眠っていたのだろうかと立ち上がり、ふと窓の方を見た。部屋は灯りが点っていて、外は日が暮れていたものだから、窓ガラスは鏡のように部屋の中を映していた。音を立てないように扉を開けて入ってきたリョウが、視線を上げて驚いたように目を丸くしたのが見えた。私は彼のその表情と、光を反射して鏡になつた窓ガラスを見て全てを悟ったのだ。私は、私が最も恐れた生き物になつてしまつたのだ、と。

どういう意味かは、言つまでもないね。ガラスに何が映つていたのか　何も映つてはいなかつたんだよ。私は鏡に映らない、ヴァンパイアになつてしまつたのだ。

私は、あの忌まわしい事件の直後に危篤状態に陥つたのだという。リョウは私を三日三晩手当したが、四日目の早朝　　その甲斐もなく、私は死んだのだと言つた。悲しみのあまり何も手に付かなかつたリョウは、私の屍体を寝かせたベッドサイドから離れられず、ひたすら自責の念に駆られていた。けれどもそれから一日経つたとき、彼は私の屍体に奇妙な点を認めたのだ。

全身の切り傷が無くなつていることに。全身の骨が、すべてくつついていることに。脈拍は確かにないのに、私が呼吸をしていることに、ね。

その後すぐだそうだ、私が目覚めたのは。リョウはこのような身体になつてしまつたと悲嘆する私を抱きしめて、もう一度話が出来てよかつた、と泣いた。いつもどこか高慢な

態度を私に対してとつていていた彼が、そのように涙を見せると言うことはもちろん初めてだつたから、私はたいそう戸惑つた。それでも彼が喜んでくれたことは本当に嬉しく思つたし、紛うことなき化け物となつてしまつたこの身でも、再び至福を手に入れられるかもしない、と わざかではない希望が見えたよ。

\* \* \*

こうして私は再びリョウとの生活を始めたのだ。町人たちにはリョウから、私がなんとか一命を取り留めたのだと伝えた。屋敷には大量の謝罪の手紙と見舞品が届いたが、私はそれらをすべて焼却して、生前以上に町に出なくなつた。

血は相変わらずリョウからもらつていたが、生前とは飲む量が違う。それまではほんの嗜好する程度だつたのが、この身体になつてしまつてからは血液そのものが『食事』となつた。私が恐れていたのは、リョウの血を吸いすぎてしまうのではないかということだ。リョウには黙つていたが、一度の『食事』を腹一杯摂るとすると、成人男性の血液量のおよそ半分は飲まなければならぬようだつた。そんなことをしては失血死させてしまうだらう?

私は常に空腹をこらえていた。

この身体になつて良かつたことは、酷く鼻が利くことかな。私はリョウと共に、女学生が殺された現場に毎夜通つた。どうしてあのようになつたらしい目に遭わなくてはならなかつたのか 真犯人を見つけたい一心だつた。あの夜、リョウに届いた手紙はまるきりの偽物だつたらしい。そのように手が込んだことまでして私を貶めようとする人間に、正直心当たりはなかつたのでね。藁をも掴む思いだつたよ。

現場に共通していたのは、ひどくきつい香水のよつな、甘つたるい臭いがどこにもこびり付いていたことだ。それが犯人のものであることは、明白だつた。

そのように毎夜動き回つていれば、より腹が減るのは当然のことだ。けれどもこの頃、リョウは疲労と貧血が重なつて体調を崩しがちだったのだ。

私は、『食事』を絶つた。彼の身体を蝕んでまで生き長らえようとは思つていなかつたからね。私は、食事を絶てば人間のように餓死をするものと思っていた。だが実際は……昨晩のとおりだ。自らの身を守ろうとして『暴走』してしまつのだ。意識がなくなり 気づけば、私は理性を失つて『食事』をしていた。リョウのためにと思つてしたことは、結果として、彼の命を奪つてしまつたのだ。あの時ほど自分を呪つたことはない。

私は、絶望の闇に囚われた。様々な方法を使って自らの命を絶とうとした。 だが、死ねなかつた。

私は屋敷の庭にリョウの墓を建て、それから犯人捜しを再開した。それでもしなければ、私は狂つてしまいそうだつたから。そして私はついに見つけた。

驚くことに、それはあの夜、私を殺したうちの一人 私にナイフを突きつけた、あの若い男だったのだ。

男は、少女たちを殺すことに快楽を覚える性質の人間だつたらしい。その所行の全てを、私が外国人だつたということだけで全てなすりつけようとしたのだ。

私はある晩、男の家に忍び込み、彼を糺した。彼は全て認めたよ。笑いながらね！

その笑みを見た私は、酷く残酷な衝動に駆られた。

この男がいなければ、このような身体になることはなかつたのに この男が馬鹿なことをしなければ、リョウが死ぬこともなかつたのに、と。

私が不穏なことを考えたのが分かつたのだろう。男は暖炉から火掻き棒を取り出して私に向けて振り回した。生身の人間であれば多少なりひるんだろうが、私にとっては脅しにさえならない。私はそれを右手で奪うと、残つた手で鳩尾に当て身を食らわせてやつた。右手の平は熱を帯びていた火掻き棒の所為で焼け焦げているようだつたけれど、構わなかつた。

力の抜けた男の首筋に牙を剥き、それこそ血の気が無くなるほど私は『食事』を貪り続けたのだ。 不味かつたよ。血の味というのには、その人間の性根によつて善し悪しがあるのだろうか、というほど。悪酒のような不味さだつた。

ぐたりと倒れた男を見た瞬間、何とも言えぬ快感と、同時に、途方もない空虚が腹の底から湧いてきて、私は気分が悪くなつた。身体はとつくにヴァンパイアであつたのに、心はまだ人間だつたようだ。身も心も化け物に成り下がつたという事実が、私のわずかばかり残つていた良心を責めた。

その責め苦に耐えかねた私は、また食事を絶つた。馬鹿だと思うだ

う だけれど血を見るたびに、リョウを殺した日のことを思い出すのだよ。男を殺したこと自体には、正直何の感慨も湧かなかつた。ただ、犯人を見つけて恨みを晴らしてしまえば、後に残つたのはリョウを殺してしまつたことを嘆き続ける私一人だ。私が蘇つたのはきっと、真犯人を捜すことへの執念と、再びリョウと暮らすことへの執着に違いない。そのどちらも失つては、私は生きる理由さえ見つけられなかつたのだ。

私はそれ以来、完全に人との関わりを切つた。町の人間たちは、私が屋敷を捨てたか、死んだのだろうと思っていたようだね。それは私にとって好都合さ。疑いをかけられることなく『食事』をすることが出来たからね。私は一人殺めるたびに薔薇の苗を植えるようになった。罪滅ぼしにはならないだろうけれど、私が一体何人を手にかけたのか忘れないために。

## 3

すっかり話が長くなってしまったね、と笑んだサイプリスは、ふと視線を落として流惟を見た。あどけない寝顔に表情を緩ませる姿からは、おおよそ彼が語ったような壮絶な半生を送ってきたとは予想も付かない。

だからこそタチが悪い、と那由多は胸中で盛大に毒づく。サイプリスは酷く愛おしげに、流惟の髪を撫でていた。那由多は不機嫌そうに顔をしかめてから、青年の美貌を真っ直ぐに見据えた。「あなたが流惟に助けを求めた理由、十年前の流惟の交通事故が何か関係しているのか？」

眼鏡の下の瞳は、サイプリスの心中を探るようにひとりと彼に向かって微動だにしない。一方青年も、ふと碧眼を細めたが、何も答えようとはしない。

「答えられねえってのか。あなたは、車にはねられた流惟を叶<sup>ハシ</sup>医院に運んできて、俺と共にあいつに輸血をした男だった。違わねえだろ？」

「驚いたな、その通りだよ……いつから気づいていた？」

「あなたの姿 子供じゃなくて今のナリの方、だ」を見てすぐに分かった。まあ、子供の姿の時から、見覚えがあるなどいう氣はしていた

「そうか……、それは迂闊だったな。ずいぶん前のことだから、君はもう忘れてしまったと思つていたが」

「そんなに耄碌する歳じやねえ」

那由多は苦々しげに吐き捨てる。あくまで高圧的な態度を崩さず、会話の主導権を握っている彼だったが、その実余裕などまるでなく、

手の震えを否応なしに感じていた。サイプリスを恐れているのではない。彼がヴァンパイアであるということは最早那由多には「今更」のことであり、またサイプリスが自分を襲うことはないという確信もしていた。

恐れているのはただ一つだ サイプリスの血液を輸血された流惟が、彼と同様にヴァンパイアになってしまっているのではないが、彼と同様にヴァンパイアになってしまったのではないか、と。

「ルイならば、ヴァンパイアになどなつていらないから安心するといい」

那由多の手の震えに気付いたサイプリスは、そう落ち着いた口調で言い諭す。たちまち那由多が、安堵したようなそれでいて不愉快そうな表情を作つたことは言うまでもない。

「ヴァンパイアの血は驚異的な回復力と延命効果を持つけれど、あくまでその程度さ。ルイの血には一部私の血が含まれているが、問題はないよ」

「待て。あなたの血が未だ流惟の血液の中に有るはずがないだろう。白血球と血小板の寿命は数日、赤血球さえ保つて四ヶ月前後だ。あの事故から一体何年経つてていると思ってるんだ？」

「それは、人間の場合だろう。生憎と私の血液は人間のそれではない。残念ながら、ね」

サイプリスが肩をすくめると、那由多は苦渋の表情を作つて舌打ちをした。ヴァンパイアに人間の常識など通用しないのだ。

「私が思うに、ヴァンパイアになる条件というのは、第一に『怨恨』だ。一般にヴァンパイアに血を吸われるとその人間もヴァンパイアになつてしまふというけれど、それは根拠のない嘘に過ぎない。それが事実であるならば、リョウは今頃私の隣にいたはずだからね。逆にヴァンパイアの血液を与えればヴァンパイアになる確率は、それに比べたら遙かに高まる。だけれどそれは、人間が死んで後に幽霊となつて、こちらの世に残る確率と大差ない。 その程度さ。怨恨や、それに等しく強い心残りが無ければヴァンパイアになれない

いのだよ。つまり、ヴァンパイアの血などなくとも、強いこの世への心残りで 私はヴァンパイアになれた。望んではいなかつたけれどね

だからルイは大丈夫、と。サイプリスは微笑んだけれど、それはどこか自嘲な色が濃い。

「ルイは私にとつての希望だ」

「 それほど大切に思つてゐる子に、殺しをさせるつてのか。  
流惟にはあんたを殺すなんて無理だ。そもそも、まだ流惟は中学生  
だぞ？ そんな子供に人殺しをさせたら、一生罪の意識を抱えて生  
きることになる」

サイプリスの胸倉を掴まんとばかりに怒りを露わにした那由多は、  
流惟を起こしてしまわないように、あくまで押し殺した声で続けた。  
「あんたは流惟に、自分と同じ思いをさせるつもりか？」

「同じではない。 私は、化け物だ。 ルイは殺人を犯すのでは  
ない。化け物退治をするだけだ」

「詭弁だ。 そうやつて割り切れるほど、流惟は大人じゃない」

那由多の言葉に、サイプリスは目を伏せた。それはよく分かつて  
いる、と眉根を絞る様には、彼の流惟を大切に思う気持ちが十分す  
ぎるほどよく現れていた。けれども那由多の口調は険しいままだ。  
「どうしても死にたいのなら俺が殺してやる」

「いや 君に私は殺せないよ」

「何だと？」

那由多の瞳が物騒にぎらつく。サイプリスは話を聞いてくれ、と  
彼の手を握つた。 あまりに冷たいその感触に、那由多が僅か  
に身じろぐ。

「ルイは私にとつて希望だ。 それと同時に、銀の弾丸なのだ  
よ。血の呪いというのかな、ヴァンパイアはヴァンパイア、もしく  
は己の血を与えた者にしか殺すことが出来ない。君はリョウの  
限りなく銀の弾丸に近づいた男の曾孫だけれど、きっと殺せない  
よ」

「だから流惟なのか？ 他にあんたが血を与えた人間は、」

「後にも先にも、ルイひとりだろうね」

「曾祖父さんが、あんたの銀の弾丸に限りなく近づいたと言つたな」  
確認するように詰問した那由多は、しかし何か確信を抱いている  
ようだ。サイプリスは少し怪訝そうに首肯する。

「だが、それは私が彼に心を開いたという意味であつて

「

「それだけじゃあねえだろ。……いや、あんたは知らないのかもし  
れないな。曾祖父さんはあんたの病気及び、吸血鬼になつてからの  
体質を研究していたようだ。…………その研究を紐解けば、何かしら  
分かるかもしだねえな」

「え……、」

いよいよ目を見開いたサイプリスに握られたままだつた手を放つ  
て、那由多は先程まで読んでいた和綴じの冊子を手に取つた。

「…………流惟に何かあつたら、あんたの血を無理矢理飲んででも殺  
すからな」

そう言い置くと、那由多は忌々しげに舌打ちをして部屋を出る。  
取り残されたサイプリスは、呆然と、閉じられた扉を見つめた。

「サイプリスさん、」

半身を起こした流惟が背後から声を掛けると、サイプリスは小さく身体を跳ねさせて彼女を振り返った。昨晩のこともあってかサイプリスの顔面は蒼白で、見るからに体調が悪そうだ。流惟は慌てて立ち上ると、サイプリスをベッドに腰掛けさせた。

「今のお話を聞いていたのかい？」

「あの……、ごめんなさい。盗み聞きするつもりはなかつたんです」「申し訳なさそうに肩を落とすと、サイプリスは流惟の髪を優しく梳いた。相手が那由多ならば子供扱いをするなど憤慨するところであるが、サイプリスではそういうかない。

「気にしなくてもいい。ルイにも話さなければならぬことだつたのだから」「…………」

「…………昨日の夜、サイプリスさんが倒れるまで……夢を、見ていたんですね」「…………」

「夢…………？」

「たぶんあなたが、リョウさんを殺してしまつた夜のことだと思います。この部屋で、あなたが男の人の血を

「嗚呼、」

瞑目したサイプリスは、組んだ手を額に当てて深く息を吐いた。そのたびに彼の腹の底に潜む孤独が吐き出されるように思えた。これは触れてはいけないことだったのかもしれない、と流惟は小さく息を飲む。

「夢とはいえ、怖い思いをさせてしまったね。だけれど、それでも分かつただろう? 私はおぞましい化け物なんだ。同情はいらな

「 よ

「 サイプリスさん、」

流惟は泣きそうな顔をしてサイプリスの手を握る。彼は少し驚いたように顔を上げた。

「 ありがとう」

「 え、」

「 わたしのこと、小さいときに助けてくれたのはあなただったんですね。わたしの天使は、あなただった」

「 天使？」

首をかしげたサイプリスの黄金色の髪が、肩口を静かに流れる。差し込んだ朝陽を受けたそれは彼の背負う悲しみに反してあたたかで、やさしい。

驚きを隠さない碧い瞳に凝視されると、恥ずかしくて、少し、居心地が悪い。

「 あの事故のことはほとんど覚えていないけど その綺麗な髪の色だけ、今でもまだ日に焼き付いているんです。きっと、それまで見たことがないくらい綺麗だったから、記憶に残っていたんですね。後から思い出しても、ああ、わたしは天使に助けてもらつたんだって嬉しくなつていきました」

はにかんだ流惟はすぐに表情を曇らせる。目には見る間に涙が浮かんでくる。

「 だから、今度はわたしがあなたを助けてあげたい、と思つたけど……今も、思つていいけれど、わたしには、あなたを殺すことなんて出来ないから……っ、」

「 ルイ……」

「 わたしを助けてくれたときから、あなたは死を望んでいたんですか？ あなたが死ぬために、わたしに血をくれたんですか？」

聞いたところで流惟の身体にサイプリスの血液が流れていることに変わりはない。どんな理由にしろ自分を助けてくれたこの心優しいヴァンパイアに、流惟は心から感謝をしている。

それでも問わずにはいられなかつたのは、記憶の中の金髪があまりに神々しく清らかで、とても死を望んでいたようには思えなかつたからだ。

「こんなことを言つたところで信じてもらえるか分からぬが、あの時私は、リョウを亡くして以来初めて、誰かを救いたいと思つたんだ」

サイプリスは真摯な眼差しを真っ直ぐに流惟に向けて口を開いた。そうして固く組んでいた指をほどいて、流惟の額の、薄く残る傷跡に這わせる。

「私はリョウの子孫がやつているという病院を捜していた。だけれど迷つてしまつて途方に暮れていてね、幼い君が私に声を掛けて、自分が案内してやると、私の手を引いてくれたんだよ。君は覚えていないようだけれどね。歩き出した時、君が被つていた帽子が風に飛ばされた。君は私の手を離して、道路へ飛び出して」

サイプリスの顔が苦しげに歪む。事故に遭つたのは私なのに、彼の方がずっと痛そうだ、と　　流惟は彼の手を握る手に、力を込めた。

「血まみれの君を見て、私は恐ろしくなつた。失われていく顔色が、血が、あの時と　　リョウをこの手にかけてしまつた時と同じだつたから。そして、絶対にこの子を死なせてはならないと、思つた」大窓の外の世界は清々しく晴れ渡つていた。木の葉についた朝露が光を反射して輝いている。　　それは君の涙に似ているね、とサイプリスは流惟の頬を親指で拭つた。

「泣かないで、ルイ。私はこの日を待つっていたんだ。ナユタが言うように、優しい君には辛いことかもしれない。それは重々承知だ。だけれどね、私はこの数十年来忘れていた人間らしい気持ちを思い出させてくれた君に、殺して欲しいんだ。あの事故の直前に、君が私を案内しようとして握つてくれた手は、とても温かかつた。その温かい手によつてもたらされる死ならば　　きっと、苦しみはな

そう言いながら静かに頭を撫でるサイプリスは、悲しげに、幸せそうに、微笑んでいた。

流惟は目を伏せてむせび泣きながら、サイプリスに抱きつく。彼の肩口に押しつけた顔にも、首に回した腕にも、彼の体温は伝わってこない。だけれど背中を優しくさすってくれる手は、どうしてかとても温かいのだ。　込み上げてくる途方もない苦しさを、切なさを、もどかしさを、どうするにも出来ずにただ泣きじゃくった。

\* \* \*

「わたしには、年の離れたきょうだいができるはずだった」  
落ち着いた流惟はサイプリスの手を握りながら話し始める。泣き腫らした目は酷く重くて、開いているのさえつらいけれど、サイプリスを見据えて。

「すごくすごく楽しみで、名前とかも考えていてさ。買い物に行くたびに、男の子ならこんなおもちゃを欲しがるんだろうな、女の子なら可愛い服を着せたいなあ、なんてことばかり考えていて」「……」

「でもさ、全部、無駄になっちゃった」

微笑。悲しい話のはずなのに、以前にこの話を那由多にした時も、微笑みが顔に張り付いていた気がする。それは今回も例外ではなくて、微笑。　　それは今にも泣き出しそうな張り詰めた気持ちを誤魔化すためかも、しない。

「男か女かも分からなかつた。お母さんの顔も、お父さんの顔も知らないまま……自分の存在も理解できないまま、逝つちゃつた。本当、せつかち。誰に似たんだろ。うちの家族はみんな、おひとりしているのにね」

あの時の衝撃を忘れることが出来ない　　流惟は、サイプリスの碧い瞳を形取る長い睫毛をぼんやりと見ながら考えた。

あまりに残酷で、あまりに悲しすぎる仕打ち。毎晩涙が止まらない、気が変になりそうだつた。

「その時、人間って本当に死ぬんだなあって、しみじみ思つた。変な話だけど　　わたし、身近な人の死つて初めてで、心からそう理解したのも多分、初めてだつた」

流惟の声の調子は変わらない。作文でも読んでいるかのように淡々としていた。それがあまりに落ち着いた口調であるためか、サイプリスが気遣うように彼女の名を呼ぶ。

「お母さんやお父さんは、あの子の代わりに死んでやる」とが出来たら、どんなにか良かつただろうって言っていた。でもね、わたしはどうは思わなかつた。 むしろ、

流惟の手に力が籠もる。サイプリスは静かにその手を握り返した。真つ直ぐと、窓の外を見ている流惟の双眸が、揺らぐことはない。ただ、じつと。

「むしろ生きてあげなきや、って思ったの。あの子の死を背負つて、精一杯生きなくちゃ、って。だって、生きることは死ぬことよりずっと辛くて、苦しくて、難しくて、 幸せな、ことだから」

そう、流惟は微笑<sup>わら</sup>つた。はつとするほど美しくて、純粹な笑顔。見惚れるように瞳<sup>ひとみ</sup>したサイプリスの両手を握り直して、流惟は眉尻を下げる。

「だから、死にたいなんて言わないで。リョウさんは、あなたを苦しめるために一緒に暮らしていたんじゃないでしょ? 危険を承知であなたと生活していたのは、あなたに生きることの楽しさを教えてあげたかったんじゃないかな。わたしがここを訪れたように、リョウさんもあなたのことを助けたかったんだよ」

「私を、助けたかつ……た?」

サイプリスが唚然と呟く。流惟は大きく頷いた。

「だつて、友達なんでしょ? 那由多先生が見つけたあなたとリョウさんの写真 リョウさん、すごく幸せそうだったもん。あなたのこと迷惑とか、疎ましく思っていたならそんな顔は出来ないよね。それに リョウさんは、ヴァンパイアにはなつていな

いじゃない」

「それは……」

「あなたに殺されたことを恨んでいたなら、リョウさんはあなたのようになつた。でも、そうなつていなつてことは、

リョウさんはあなたに殺されたけれど、決して恨んでなんかいないつてこと、でしょ?」

顔をのぞき込んだ流惟に、サイプリスは僅かに身を引いて目を伏せた。

「サイプリスさんは、とても辛かつたと思います。わたしなんかが想像できぬくらいに。でも、それなら尚更生きることを、諦めちゃだめだよ。生きたくても生きられない人や、あなたのために戦死になつた人。そう言う人たちのためにも、生きなきゃ。生きて、楽しいことも辛いことも苦しいことも全部受け入れてリョウさんのこと、覚えていることがあなたの償いでしょ?う?死んだ人たちのために遺された人間が出来るのは、その人たちの死を背負つて、その人たちの分まで生きることだと、わたしは思います」

静かに目を閉じたサイプリスは、泣いていた。声を出さずに、静かに。

「ごめんなさい、偉そうなことを言つて……」

流惟はおろおろと言つと、先程自分がしてもらつたように、親指で彼の涙を拭つた。

「あの、でも……あの時の自分を、見ているような気がして、悲しくなつてきちゃつて」

「そうか」

「うん。頑張るう、サイプリスさん。背負つた人の重さで立てなくなるのつて、何だか情けないじゃないですか、」

「……ルイ」

サイプリスが微笑む。ひどくすつきりとしたような、自然な表情

で。

「ありがとう」

「……どういたしまして」



「話は終わったか」

部屋に入ってきた那由多は、両手に和綴じの冊子を抱えていた。  
「流惟、こいつに何もされていないだろうな？」

「されてないってば。もう、せんせは本当に心配性なんだからなあ  
流惟はむうと口を尖らせてみせる。サイプリスが苦笑して、彼女の頭を撫でた。

「随分とすつきりした顔しているじゃないか。感謝しそりよ　　流惟が手を汚さなくても、お前が死ねる方法を見つけてやったんだからな」

「せんせっ！　でもサイプリスさんは、生きるって……」

「話は最後まで聞け、ばか。死ぬと言つたって、残念ながら今すぐ  
ではない。寿命が来たら、の話だ」

流惟の肩を引き寄せた那由多は、手にしていた冊子のうち一冊を覗き込ませる。

「しかし、ヴァンパイアの血は不老不死の力を持つている」

「そちらしいな。だが、曾祖父さんの研究では　　吸血鬼の血液  
同士は強力すぎて、互いに殺し合うとある。一度、酸とアルカリの中和反応のようなものだ。そうなんだろう？」

「ああ、それは事実だ。　　だからヴァンパイアは、同族の血を吸うことは許されていない。自滅に繋がるからね」

サイプリスが神妙な顔をして頷くと、那由多は口角を持ち上げて、冊子の黄ばんだページを繰つて続ける。

「そこで、だ。あなたは言ったな、流惟の血液の中には吸血鬼の血がまだ残っていると。それを継続的に飲み続ければ、じく僅かずつ

ではあるが、あんたの中の吸血鬼の血は死んでいくわけだ。もちろんその死んだ分は、俺の血をくれてやる。吸血鬼の体内の血液は、骨髓で生成するのではなく摂取した血液を予めあつた吸血鬼の血液によつて同質のものに作りかえることによつて満たされているらしいな。それならば、何年かかるかは分からんが いずれ、あんたは『人間』になるつてことだ

「すごい……！ 先生、それすごくいいじゃん！」

流惟が目を輝かせて那由多の腰に縋る。驚きを隠せずに言葉を失つたサイプリスも、少なからず表情が明るくなつていた。

「ただし、あんたが吸血鬼の血を失つて、どんな副作用があるかが分からん。一度は死んでいる肉体だからな。すぐに衰えて死ぬかもしない。それから 流惟にも、負担がかかる」

「たとえすぐに死んでしまつたとしても私は構わない。それまでに、精一杯生きればいいのだから。もちろん、それはルイに無理をさせないならば、の話だ。君の体調を崩すようなことをするくらいなら、今の方が遙かにマシだ」

那由多とサイプリスの視線はひたと流惟に向けられた。両者とも整つた顔立ちをしているだけに、じつして注目されると威圧感がある。

流惟は二人の顔を見比べて、

「わたしは、それでサイプリスさんが救われるなら喜んで血をあげるよ。 と言うか、小さい時に助けてもらつた恩返しが出来るんだよね。だから、すっごく嬉しい！」

無邪気な笑顔に、那由多とサイプリスも相好を崩した。

四月。桜が舞う中を少女は駆け抜けた。坂の下の、小さな病院まで一直線に。

「おはようございます！」

扉を押し開けた流惟の声が叶医院の中に明るく響き渡る。待合室に人の姿はないが、その奥の診察室の方からは話し声がした。

流惟はそつと中を覗く。

「おい、くそじじい！ 貴様、俺が食事をしている時に田の前で血液を飲むなど、何回言えれば分かるんだ！」

「安心するといい。もうすっかり理解しているからな。耳たこだ」

「分かっているなら俺の言うとおりにしろ」

「気にするな。軟弱なお前への嫌がらせだ」

何とも低次元な言い争いだ。揃ってこの町の王子様と並び称されている一人のこのような姿は日常茶飯事である。

思わず吹き出すと、那由多とサイプリスは同時に流惟を振り返った。仲が悪いのか良いのか、よく分からぬ二人だ。

「おはようございます」

「オウ。今日から学校か？」

「はい。だから、その前にサイプリスのご飯を、と思つて」

『ご飯』と言えば至極人間的な印象を聞く人に与えるが、その『ご飯』 자체が決して人間的ではない。サイプリスのご飯つまり血液を、流惟と那由多は毎朝少量ずつ彼に提供するのがここ数ヶ月の日課だった。

「ならば、学校に行つてよし！」

「え、でも」

「こじじいは当分絶食するそつだ。絶食ダイエットだつてよ」

那由多は不機嫌そうに言うと、サイプリスを見遣る。青年サイプリ

リスは人を小馬鹿にしたような嫌味な表情で応じる。

「血を吸い尽くしてやろうか、若造」

「くたばれ、じじい」

第二次口喧嘩勃発。流惟は那由多の椅子に腰掛けて、二人を眺めた。

サイプリスは現在、那由多の病院に居候をしている。昨夏から比べたら別人のように、毎日楽しそうに見えた。顔色もいい。明るくなつて、自嘲や影のある微笑ではない、心からの笑顔も見せる。

「それじゃあ、わたし、学校行つてきます」

流惟が立ち上がると、サイプリスは上着を羽織つて、そこまで送る、と笑んだ。

「実力テスト、頑張れよ

「はーーいつ！」

玄関まで見送りに来た那由多がひらひらと手を振るのに元気よく応えて、医院の外に出た。

\* \* \*

「昨日、緋薔ひじょう館かんに行つてきた」

桜並木の下で、不意にサイプリスが口を開く。流惟は目を丸くして彼を見上げた。

「昨日？ 昨日のいつ？」

「夜。私はヴァンパイアです。ヴァンパイアの辞書には不可能の文字はないって、聞いたことがありますか？」

春日町は一時間や一時間で行ける場所ではないのに、と首を傾げた流惟に、サイプリスはそう言って笑いかけた。

「リョウのところに行つてきたんだ。いろいろ伝えなくては」と、思つていたから、「

「いろいろ？」

「そう。最近私は、この身体になつて以来初めて、『生きている』のだと感じるんだ。だから、近況報告のようなものかな。目で見たもの、肌で感じたことを、リョウに聞いて欲しくて。もちろん、ルイのことも話したよ」

「なんか、照れくさいなあ

流惟ははにかんで早足になつた。一方、サイプリスは立ち止まつて続ける。

「いつだつたか、緋薔館のバラは眞血の色をしていると、言つただ  
「ひ」

流惟が振り向く。サイプリスの顔色を伺つてはいるようだつた。

「リョウの墓の周りは尚更、深紅のバラしか咲かなかつた。

昨日行つた時も、相変わらず緋あかかつた

サイプリスは平氣だ、と言つよう微微笑して、でも、と言葉を紡

ぐ。

「ただ、一輪だけ……真っ白なバラが咲いていた」

深紅によく映える純白。

一面に広がる香。

ただ冷たかつた墓石が僅かに温かく感じたのは、気のせいだったのだろうか。

「私はこの手のひらの痣を見るたびに、愛おしく思っていた。憎い男のせいでついた痣だけれど、私の罪を教えてくれるからね。今でも愛おしいのに変わりはないけれど、それは同じ理由からではない」サイプリスは、流惟に右手を差し出した。人形のように白い肌に残る痣は一輪のバラを描いている。そつとそれを指でなぞって、流惟は首を傾げた。

「リョウの墓の前に咲いた、一輪のバラを思い出すんだ。 思い上がりかもしれないけれど、私は赦されたのではないかと思える。忘れていたりリョウとの思い出が、蘇ってくる」

「思い上がりなんかじゃないよ もうひとつ。私もこの痣、好きだな。すごく綺麗だもん！」

無邪気に笑う流惟に、サイプリスも目を細めた。そうか、と優しく甘い声が言って、少女の笑みをますます深める。

「ルイがそう思ってくれるならば、もつと、愛おしく思えてきたよ

Story is the end . . .  
And , Thanks for your reading . . .



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9162a/>

---

てのひらの中のバラ～或るヴァンパイアの贖罪～

2010年10月10日15時10分発行